

---

# とある弟の大能力

咲魔@テラ駆け出しドンダー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある弟の大能力

### 【Nコード】

N3928BA

### 【作者名】

咲魔@テラ駆け出しドンだー

### 【あらすじ】

とある転生者の姉をもつ弟は学園都市で暮らしていた。能力は反発力操作。風紀委員に所属。同僚の上条当麻のトンデモ行動に制裁を加える日常を歩んでいくのであった。

## とある弟のプロローグ（前書き）

はい、やっちまいました。掛け持ちで多分更新は遅いですが（＾  
）ノ  
-

## とある弟のプロローグ

姉貴、宇都宮咲魔はある日を境に突然いなくなつた。理由は不明。その日を境にただただいなくなつた。

その日、部活に入つてなかつた姉貴は家でゲーム。俺と一緒に買ったゲーム。『ファンタシースターポータブル2』をやっていた痕跡があつた。何故かベッドの上にタイトル画面だけついていた。俺は部活帰りで遅くなつて学生寮に戻つた。

ケータイを開くと20件メールが来ていた19件は母からの電話の留守電であつた。一件は姉貴からだつた。

母は言つた。姉貴がうちに来ていないかと。勿論来ていない。母から告げられた。姉貴が失踪したと。

その後姉貴のメールを見た。そこには、当分会えないとだけあつた。

いつの日か聞いたが姉貴はもともと養子らしい。道理で兄弟なのに似てないわけである。でも、そんなの関係無いくらい俺は姉貴と仲がよかった。小学生の頃から取り敢えず姉貴に付いて回っていた。姉貴の友達からも仲がいいねと羨ましがられていた。

まあ、姉貴は活発でいろんな友達がいるから人見知りだつた俺としては気恥ずかしかつたがな。

姉貴、今ごろどうしているだろうか。家族の中ではもう姉貴の話は禁句になっている。と言つても、学生寮暮らしの俺は関係無い。

俺は姉貴が今も元気に生きていると信じている。

姉貴、俺は学園都市で楽しく生活してるよ。同僚の上条とか、小さい頃近所さんだつた御坂とかと楽しく…ね。

敦也 side

よう、俺は宇都宮敦也。学園都市のとある高校の学生寮で同僚の上条当麻と暮らしている大能力者：所謂レベル4である。

なぜ大能力者なのに名門に行かないかというその心はただ祭り上げられるのが面倒だからだ。

世間は能力のレベルが権力であるからな。面倒くさがりの俺としてはくだらないとは思っていない。

おっと、能力を言ってなかったな。俺は『反発力操作』だ。正直な話、それがどうしたって能力だ。ただ単に反発力を操作する能力。なんに使うんだよ。

「当麻。」

「ん？なんだ？」

当麻に試し撃ちをする。

ポケットに常備のベアリングを指で弾く。

「おまつ！？つぶねえな！！」

普通の人間が大怪我する程度の反発力できっかり脳天に撃ち込んだ。面白いことに、右手で防いだ。防いだのだ。

こいつ、上条当麻は無能力者。レベル0である。であるのだが右手には全ての能力による干渉を無効化する能力がそなわっている。

「バカがいたから狙撃した。」

「俺かい！？ああ…お前といいビリビリ中学生といい…不幸だ…」

こいつはすぐ不幸だって言う。まあ、こいつはとことんツイてない

やつである。

昨日はあの伝説の二千円札を自販機に飲み込まれたらしい。

しかも俺がジューズ買ってこいとパシったので俺の金だ。俺もこいつと同僚になってからときたまツイてない。勿論幼少時の姉貴直伝のローリングソバットを脇腹に決めてやったし金も返ってきたのだが。

「美琴か？」

「そーだ。」

美琴…御坂美琴は名門常磐台中学の二年生で、俺の友達だ。あいつは学園都市に七人しかいない超能力者（レベル5）の第三位である。まあ、こつちも必死でレベル1から能力を磨いてレベル4になったのに、美琴は天才だよな。努力の。

「だから今日は一晩明けての帰宅か。なんとも、お前も美琴もあなどれんな。」

「どーいう意味だよ。」

「さてね。じゃ、俺は風紀委員ジャッジメントの仕事があるからよ。」

「夏休みなのに大変だな…。」

「風紀委員ジャッジメントをしながらでも、一般教科の点数もそこそこ取れるんだから、当麻もちゃんと勉強しろよ。ノルマ宿題な。俺が帰ったときにしてなかったらローリングソバット。」

「うえ勘弁。」

いつてきますと一言。寮を出た。

風紀委員とは、能力者の生徒が学園都市の治安を維持する組織である。まあ、担当は学区内だけだがな。

気だるい昼下がり、俺は風紀委員の第177支部に向かう。

「来たぜ。あ、固法さん。」

「あ、今日は宇都宮君。御坂さん来てるわよ。」

私は出るからと固法さんは出掛けていった。

「おー、三人とも揃ってんなー。」

「あ、宇都宮君。」

「ごきげんよう。」

「今日は宇都宮先輩。」

上から御坂美琴、白井黒子、初春飾利。いつも絡んでいるメンバーである。

「それで？美琴は昨日当麻をよくも追いかけてくれましたねこんちくしょう。寮監にバレないように当麻を部屋に入れてローリングソバットするまで俺の精神の磨耗がマッハなんだが。」

「ご…ごめん。」

「私もお姉様が出ていっているのを寮監から誤魔化すのに大変でし

たのよ。」

と白井がニコニコしながら言った。白井と美琴は同じ部屋のようだ。

「だ…だってあいつが…。」

「はいはい、人のせいにしない。」

「うー、宇都宮君はいつも私を子供扱いして…。」

「中二はまだ子供だろう。」

もう。と頬を膨らませる美琴にニコニコする三人であった。

「仲がいいんですね。御坂さんと。」

初春が白井と会話してる美琴を見ながら言った。

「まーな。」

素っ気なく返した。まるで、姉貴と一緒に居たときのことを言われているようで…。

「ときに美琴、なんでここに居るんだ？また変なことに首を突っ込んでんのか？」

「いいや、別に宇都宮君には関係無いわよ。」

「ならいいが。」



御坂美琴という人物は取り敢えず事件性のある物事には首をすぐ突っ込みたがる。なら風紀委員ジャッジメントに入れよと言ったが、拒否された。なら首を突っ込むなよ…。

「んじゃ俺はコーヒーでも飲みながら仕事すつかな。美琴。」

「な…なによ。」

「ちったあ俺に頼れよ。お前になんかあったらお前の母さんに申し訳が立たんからな。」

「余計なお世話よ。」

いつもこいつはこうだ、ちったあお兄さんを頼つても良いのによ。まあ、妹達シスターズの情報を流す時季ではないな。場合によっちゃ美琴がいつのまにか知ってる可能性もあるが。

「ならいいんだね。」

俺はパソコンに向かい、風紀委員ジャッジメントの仕事を始めた。この後、上条当麻がとんでもないアホをしでかすことを知らずに。

## とある弟のプロローグ（後書き）

つーわけで転生してもうた！！シリーズの外伝てき要素ですかね。  
外伝が本編なんて馬鹿なことにならないようにしたいです。

## とある弟の重力子（グラビトン）（前書き）

二話目だぜヒャッハアアア!!

自分で書いててなんだけど敦也まじイケメンwwそしてまじシスコ  
ンwwwwww

やべーやべー、残念なイケメン臭がやべーっすww

はい、重力子事件ですね。

一気に解決しちゃうのは主人公補正ですww  
能力ってなんなんだろうね（とーいめ）

## とある弟の重力子（グラビトン）

当麻 side

「不幸だあああつ！！」

今日は朝っぱらから敦也が風紀委員の仕事で出ていたので、のんびり宿題でもしようとした矢先、俺のクラスの担任である小萌先生からケータイに補習があると呼び出され、宿題も出来ぬまま学校に行く途中小石に引っ掛かって転けながら登校し、補習を受けたら長引いてもう外は夕暮れ。このまま帰ったら敦也に宿題してないことがバレてローリングソバットを食らうのがおちなので、ファミレスに寄ったら、中学生くらいの女の子が不良に囲まれてるのをみて、助けてやっかなーなんて思ったのが運の尽き。トイレからゾロゾロと不良が出てきて、「トイレにゾロゾロは女子の特権だと思ってましたあ！」と叫んでいま走って逃げてる。

「ふ…不幸だ…。」

車も通っていない吊り橋。真ん中に来た辺りで振り返ると…。

「うつ…！？」

閃光が見えた瞬間右手を出した。相手は常磐台中学の超電磁砲、御坂美琴。お得意の右手でレールガンが無効化した。

「不良を護って善人氣取り？」

そうだ、別に俺はコイツを助けたかった訳ではなく、コイツに絡んでいた不良を助けたかったのだ。なんたって超能力者（レベル5）だし、気性が荒いし。

「まったく、あんたのせいで情報も聞き逃したし…。」

「情報？」

「アンタには関係無いのよ。まったく、不良なんか相手に逃げるなんて強者の余裕かしら？」

「いや、俺システムスキャン身体検査じゃ無能力（レベル0）なんだが…。のわっ！？」

雷撃の槍が上条当麻を襲うが、やはり右手をかざして無効化する。

「知ってるわよ。まあいいわ。あんた、私と勝負しなさい。」

「勝負って…お前俺に全戦全敗じゃないか。」

「ま…、負けてない！」

「じゃあ、いつになったら終わるんですか？」

「わ…、私が勝ったらよ。」

「だろうと思ったぜ。まったく、不幸だ…。まあ、いいぜ。早く終わらせたいしな。」

再び雷撃の槍が上条当麻を襲うが、無効化の右手が能力による干渉は全て無効にするのだ。

美琴は、電磁力で周囲の砂鉄を集め、砂鉄の剣をつくった。

「おいおい、武器はやばいつて…。」

まあ、そこからはご想像の通り、上条当麻は一晩中御坂美琴に追いかけて回され、前回述べた通りに、宇都宮敦也からローリングソバットを受けることになるのである。

敦也 side

……グラビトン 虚空爆破事件：ふむ、アルミ缶の量子の速度を飛躍的に上昇させて爆発させるという事件である。

「んー、くっそう。わからんなー。」

未だに誰が何の目的でやってるか不明。先程重力子の異常を観測して、固法さんが調査に向かったが…。

俺の隣では先程から白井がパソコンと地図とをにらめっこしている。初春は学校であるのだ。

「はあー、八方手詰まりですわね。未だに次の犯行現場も解つておらず、ジャッジメント 風紀委員も9名負傷しておりますのに…。」

「9名ね…。おい白井！！幾らなんでも多すぎやしないか？」

「い…いきなりどうなされて!?!？」

パソコンで今思い当たったある一つの共通点を照合してみる。やはり合致。ということは…。

「白井、グッジョブだ。<sup>グラビトン</sup>重力子事件の目的がわかった…が遅すぎたな…。」

「な…なんですか？」

白井は息を飲んだ。

「よく聞け。奴の狙いは…『<sup>ジャッジメント</sup>周辺の風紀委員』なんだ。妙じゃないか？あれだけ場数を踏んだ風紀委員が9件中全て一人負傷してるんだ。」

「言われてみれば…そうですね。…あ、固法先輩から連絡ですわ。お待ちくださいませ。…はい、白井ですの…はい、はい。なんですって！？…はい、失礼します。」

「どうだったよ？」

返ってきたのはほぼ予想通りの事であった。

「固法先輩と同行していた<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員が一名爆風に巻き込まれて負傷しましたの。そして…」

そのあとは丸つきり予想だにしない展開であった。

「それと、また重力子の乱れが観測されたそうですわ。」

「何処だ？俺が行く。」

「せ…先輩自身が行きますの！？場所はセブンスミストという洋服店のようです。」

「くっ…飛ばしてギリギリか。白井、初春にも連絡入れる。あいつのオペレートがほしい。」

「了解しましたの。」

風紀委員専用のインカムを耳に装備し、ジャッジメント風紀委員の腕章を着けながら走る走る走る。

能力による反発力強化でかなり足が早くなる。普通であれば早すぎて制御不能に陥る速度で走る。

こうやって走っていると、小さい頃姉貴と姉貴の友達と鬼ごっこして遊んだのを思い出す。姉貴は足が馬鹿みたいに早くて、逃げるのに苦労したんだっけ。

そのバケモノのお陰で俺の今の身体能力があるわけだが…。

『宇都宮先輩、セブンスミストにお姉様と初春が！！』

「ちっ…最初っから初春狙いかよ！！間に合えよ…！」

見えた！！

自動ドアを突き破りながら目標の爆弾を確認。ぬいぐるみのなかにアルミスプーンでも隠しているのか。

「あ…敦也！？」

「当麻！？…っしゃあ丁度いい。爆風からあの女の子を護りやがれ



「!!」

「え？のわあああああつ!!」

当麻を着地させた瞬間、ぬいぐるみが大爆発を起こした。

職務上、一般人を巻き込むのは誉められた行動ではない。が、当麻がそこにいた僥幸。こいつの右手は幻想の力を無効化する。

頼むぜ当麻。怪我したら俺が責任とってやるから…。

案の定、反射的に右手を前に出した当麻は爆風を見事無効化する。

爆風に隠れて逃げようとしている犯人。今なら現行犯で逮捕できる。裏口から出ていくようだ。

「初春！事後処理頼むぜ！」

「は…はいいっ!!」

裏口から出た犯人を尾行。尾行スキルも高いのは仕様だ。伊達にバケモノと張り合ってねえよ。

「い…いいぞ。また一人風紀委員を倒したんだ。ふふ…ざまあみやがれ。あつははははは!!」  
ジャッジメント

「お楽しみの所悪いんだが風紀委員だ。現行犯で逮捕する。因みに怪我人は誰一人出てないぜクソヤロウ。」  
ジャッジメント

「ひっ!?!うっ…嘘だ。あれは僕の最大出力の…。」

ボサボサの髪、痩せた体型にの男である。重力子事件の犯人は。  
グラビトン

「あれだけの出力を出すとすると…大能力者（レベル4）か。風紀  
委員のデータベースにはそんなやついなかったが…。だが丁度いい  
俺も大能力者（レベル4）だからな。」

男はニヤリとすると、後ろのバックからアルミ製のスプーンを取り出した。

…だが、それは次の瞬間に閃光が走り、砕け散った。

「宇都宮君あんだね…一人で行っちゃわないでよ。」

「美琴か…。俺の必殺技が出る幕なしですな超電磁砲。」

常磐台の超電磁砲とはよく言ったものである。彼女の能力は、電気  
使い（エレクトロマスター）。超電磁砲というのは、フレミングの  
力を利用してコイルを音速の何倍かで弾き出すという美琴の必殺技  
である。超能力者（レベル5）なので威力もおりがみ付きである。

「つーわけでだ、現行犯で逮捕するぜ。」

手錠をかける。

わーわー喚き散らしてるところに美琴がゲンコツを食らわせあえな  
く気絶。これにて重力子事件が解決したのであった。

## とある弟の重力子（グラビトン）（後書き）

おいちゃー。

うん、取り敢えず一言。

ミジケーｗｗｗｗ

短すぎて笑いがｗｗｗ

おっと、取り乱したすまない。orz 土下座

次は禁書目録編になりますな。

とーま、インデックスは敦也のことすっごくシスコンだと思っただ  
！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3928ba/>

---

とある弟の大能力

2012年1月14日18時45分発行